

特別講演 1

「我が国におけるステロイド性骨粗鬆症の

管理と治療のガイドライン」

藤田保健衛生大学医学部 臨床検査部 講師

田中 郁子 先生

ステロイドは強力な抗炎症・抗免疫作用により、科の隔てなく頻繁に用いられる。ステロイドの副作用の多用さは十分知られるところであり、これまで感染症、耐糖能異常、消化管潰瘍などに多くの予防治療的努力がなされてきた。ステロイドによる骨量低下それに引き続く骨粗鬆症は、知識として理解されていても、これまで十分な対処がなされていたとは言い難い。

近年の骨代謝学の進歩、EBM (Evidence based Medicine) の考え方、ビスフォスフォネートを始めとした新たな骨粗鬆症治療薬の開発により、骨粗鬆症の治療は新たな局面を迎えた。原発性骨粗鬆症については、診断基準、治療ガイドラインが整備されほぼ一定の成果をあげてきたといえる。骨代謝領域では、次なるターゲットとしてステロイド性骨粗鬆症に注目が集まり、海外では大規模な臨床研究もなされている。その結果、本症における一次予防の重要性もわかってきた。このような状況下、欧米諸国からはステロイド性骨粗鬆症に対する予防治療ガイドラインが発表され運用されている。我が国においても、国内の縦断研究や横断研究のエビデンスを元に、「ステロイド性骨粗鬆症の管理と治療のガイドライン」が第 22 回日本骨代謝学会総会において発表された。今後の我が国におけるステロイド性骨粗鬆症治療の柱となるガイドラインであり、ステロイドを使用する医師はすべからくこれを考慮すべきであろう。

本講演では、我が国におけるステロイド性骨粗鬆症の管理と治療のガイドラインを中心に、欧米版との比較、また実際の運用について注意すべきことを、臨床を中心に解説する。